



Title	伊藤仁斎研究
Author(s)	子安, 宣邦
Citation	大阪大学, 1987, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35610
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について <a> をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【1】

氏名・(本籍)	子	安	宣	邦
学位の種類	文	学	博	士
学位記番号	第	7593	号	
学位授与の日付	昭和62年3月20日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	伊藤仁斎研究			
論文審査委員	(主査) 教授	加地 伸行		
	(副査) 教授	黒田 俊雄	教授	矢守 一彦

論文内容の要旨

本論文は、江戸時代初期、古学派儒家を代表する伊藤仁斎の学問と思想との特質を、仁斎の手稿本類によりつつ論述したものである。全体は、序章および六章からなり、さらに仁斎略年譜・参考文献・補論二篇が附されている。

序章 仁斎の撰述としては、贋刻本『語孟字義』を除き、生前において刊行されたものではなく、没後、子の東涯らによって順次刊行された。もっとも、仁斎は自己の撰述に対して、終生、たえまなく補訂を続けていた。その間の経緯は、今日まで伝存してきた諸稿本類によって知ることができる。それら諸稿本類は東涯らによって整理され、解釈の統一・補訂が加えられた後、仁斎の撰述として刊行されている。したがって、厳密な意味での仁斎の研究は、生前の最終稿本の写本である林景范本によるべきである。

また、仁斎学は、周知のように、朱子学を前提とし、その批判的展開をなしたものであるとされている。しかし、例えば『語孟字義』が、朱子の高弟である陳北溪の『性理字義』を範型とし、部分的にはその換骨奪胎とも言うべき仕方で記述されたものであることに示されているように、仁斎学・朱子学両者の慎重な比較検討が必要である。当時、朱子の『論語』・『孟子』両集注は、日中両思想界において最高權威を有し、日中両国の思想家に多大の影響を与えていた。仁斎の諸撰述は、『論語』・『孟子』両書によることを基本としており、朱子の両集注の批判的読みかえが随所に見られる点を研究する必要がある。

第一章 人倫的世界の地平——仁斎における「実」 仁斎がしばしば用いる「実徳・実心・実理」といったことばにおける「実」字に着目し、何をもって実とするかを明らかにする。すなわち、朱子の「天地の間、唯一の実理のみ」・「天道の誠」というような宇宙論的・存在論的解釈に対して、仁斎は、

実理とはこの現実の世界における人間の道にはかならないとしたことを跡づけている。

第二章 仁斎学の構造——仁斎における『論語』・『孟子』 『論語』・『孟子』両者の意義や関係に対する仁斎の立場を通じて、仁斎学の構造を明らかにする。すなわち、仁斎は、宋学が『論語』解釈において高踏的思弁を行なっていることを批判し、『論語』を孝悌忠信という平明な教えを説くものとする。そして仁斎はさらに『孟子』をば、孔子の平明な教えを敷衍する「論語の義疏」として位置づけたものとしている。

第三章 人性と道德との間——仁斎倫理学の問題 仁斎の道德論を明らかにする。すなわち、仁義礼智の徳は性（心の本体）に具わるとする朱子学における性の概念を仁斎は強く否定し、性をば具体的に人の生の特性（生れつき）であるとし、仁義礼智の徳は人間世界における行為の標準であるとしたとする。また、仁義礼智の方向性を有する「四端（惻隱・羞惡・辞讓・是非）の心」を、人間の生存に固有なありかたとしてとらえた仁斎の理解を論証している。

第四章 「人の外に道無く、道の外に人無し」（一）——『童子問』における成立過程 仁斎の思想を代表する「人の外に道無く、道の外に人無し」ということばの意味を明らかにする。すなわち、このことばの意味の形成過程を『童子問』諸稿本類（元禄四年自筆本・元禄六年自筆本・六年本付箋・元禄八年本・林景范本訂正文等）を通じて跡づけている。

第五章 「人の外に道無く、道の外に人無し」（二）——道と人情 朱子もまた「人の外に道無く、道の外に人無し」を言う。しかし、朱子にあっては、「道」は「道体・理・性」など本体的概念として扱われている。そういう道と人との関係においては朱子は「人の外に道無く、道の外に人無し」と述べる（『論語集注』）。これに対して、仁斎はこの言葉によりつつ解釈を改める。すなわち、仁斎は、人を措いて道はないとし、人倫関係における人の常態性を道であるとし、そういう意味において「人の外に道なき」ことを述べたものであるとしている。また、仁斎の「人倫日用の道」という「道」の概念とあい補うものとしての「人情」の概念が分析されている（仁斎は「人情の至りは即ち道なり」という）。

第六章 天道と人道——仁斎の生生的世界観 道には天道と人道との両者があるが、これに対する仁斎の立場を明らかにする。すなわち、仁斎は、天道（陰陽）・地道（柔剛）・人道（仁義）は、同源的に連続するものではないとする。そして、天・地・人それぞれがそれぞれ生生活潑する運動において一であるとし、「天地の間、一元気のみ」という「一元氣」論を唱える。したがって、朱子的な生成論的宇宙像を構成することではなく、生において一、善において一、というふうに、仁斎の目前にあるものは、ただ生生運動する天であり、地であり、人であった。

ただし、一方、仁斎は、徳と福との一致という天道の必然性を主張し、人道を尽くすものに天道は福（さいわ）いするという天の福善殃淫の必然性を認める。そのことによって、天の必然性と人の自取の道とが相互的に連関しているとする。

補論一 近世儒家における人性と知 山鹿素行・荻生徂徠の人性概念を朱子学的人性概念と対比しながら検討し、近世儒家における人性概念の変容がどのような知のあり方に連関するかを、富永仲基までを視野のうちに含めて明らかにしている。

補論二 有鬼と無鬼と 仁斎と徂徠の鬼神観を対比しながら、儒家におけるいわゆる無鬼論・有鬼

論の構造的特質を明らかにしている。

論文の審査結果の要旨

従来の日本近世思想史研究においては、仁斎における朱子学批判の面をのみ強調することが多かった。しかも、その批判が朱子学とどのようにかかわっているかということの実証的研究は意外と少なかったのである。

これに対して、本論文は、序章の視点に示されるごとく、仁斎生前の最終稿本に基づく林本等によりつつ、仁斎の思想の全体的研究を行なうことを試み、仁斎の主要撰述を研究史上はじめて、実証的に検討している。その結果、むしろ仁斎は朱子学に対する深い理解の上に立って、ある意味では換骨奪胎とも言うべき、朱子学的概念の転倒あるいは転換を行ないつつ、朱子学の中から「人倫的世界」の重視に基づく独自の思想体系を生み出してきたことを思想史的に明らかにすることに成功している。

章を追って言えば、第一章では、仁斎の思想が人倫的世界における生き生きとした人間存在のありようを第一としたことを、朱子学と対比して示し、従来、日本思想史上において言われていた、仁斎の人間の解釈なるものの根底を明確にしている。

第二章では、たとえば朱子学もそうであるように、経学一般が『論語』・『孟子』を聖賢の書として一体化して理解するのに対して、仁斎が『論語』・『孟子』を思想史的展開あるいは連関において把握し、「意味(含蓄)・血脈(聖賢の思想の文脈)」論として学問方法論を立てたことを正確に示し出している。

第三章では、儒教道德の根幹をなす仁義礼智という徳は、それ自体、実体的に存在するとする朱子学的解釈を仁斎は否定し仁義礼智それぞれをむしろ自己実現の行為としてとらえていることの分析を通じて、人が行為的存在であるそのことが、仁斎の「道とは、人倫日用、当行(まさに行くべき)の路」という立場の意味であると解釈し、朱子学の「道とは、人倫日用、当行(まさに行なふべき)の理」という抽象化の立場と相違することを導き出している。

第四章では、天理図書館所蔵古義堂文庫中の『童子問』稿本類を精査し、綿密な比較検討を行なっているのが注目される。その文献学的成果に基づきつつ、第五章では、仁斎の作業が宋学を前提にしたその読みかえ、換骨奪胎でもあったことを実証している。この連続する第四・第五章の行論は、説得力に富んでいる。

第六章では、朱子学において天が宇宙論の中に位置づけられていたことに対する仁斎の批判が「生生的存在としての人間のあり方」重視の立場から生れてきたものであることの検討を行ない、仁斎学(古義学)における人倫的世界重視の根本を克明に論述している。

以上述べたような成果があるが、この成果をさらに日本近世思想史全体の中で具体的に位置づける指摘があれば、一層、光彩を放ったであろう。

なお、行論の部分において若干の疑問点なしとしない。たとえば、第二章第六節の場合、『論語』の

「孝為仁之本」という文を朱子が「孝は仁を為（な）すの本（もと）」と解釈するのに対して、仁斎は「孝は仁の本（もと）と為（な）す」という解釈を提起したとする。しかし、朱子の『論語集注』（新注）に対する何晏の『論語集解』（古注）は、元来、「孝は仁の本と為す」と解釈しており、仁斎の解釈は必ずしも新しいものではない。だから、日本思想史上における仁斎の解釈を示すとき、同時に、中国思想史上における古注についての配慮が払われるべきであろう。しかし、中国思想史より見た細部の疑問点は本論文の全体的価値を低めるものではない。従来、研究者が見過ぎていた仁斎撰述の諸稿本類を駆使して、朱子学との対比において仁斎学の新しい位置づけを行なった本論文は、日本思想史学界に寄与する独自の価値をもち、伊藤仁斎研究に一新面を開いた論者の力量は高く評価できるものである。

よって本研究科委員会は、本論文を文学博士の学位を授与するに十分価するものと認定する。